

3月・月例研修会 (歴文共催)
明日香の古墳と万葉歌碑めぐり

杉本 登



春とはいえまだ肌寒い日々が続く3月22日、歴文研修会と例会を兼ねて明日香を歩いた。当日はうす曇りで13人の参加者であった。当初は奥明日香を訪ねる計画であったが、奈良交通バスの定期運行が中止になっており足の便の確保ができないことや、早春の奥明日香は見るべきものがないため、明日香村で最近話題になっている古墳と万葉歌碑めぐりに変更した次第である。

10:05に近鉄飛鳥駅前に集合し、まず牽牛子塚古墳に向かう。この辺りは真弓の岡と呼ばれており万葉歌にもよく登場する。古墳は7世紀後半の古墳時代終末期のものであり、石室が2つに区分されて2人が埋葬された形跡があることより、天智・天武天皇の母の斉明天皇の墓ではないかと、新聞などで話題になった。書紀には667年の陰暦2月27日に斉明天皇と間人皇女を小市岡上陵に合葬し、同日大田皇女を陵の前の墓に葬ったとある。この古墳は当初円墳と見られていたが、その後の調査で高貴な人を葬る八角墳であることが判明し、またすぐ前から未知の古墳(越塚御門古墳)が発見されたことから斉明陵ではないかと騒がれることになった。間人皇女は中大兄皇子の妹で孝徳天皇の皇后であった。また大田皇女は中大兄の娘で大海人の妃であった。つまり中大兄は母と妹と娘を同時に葬ったわけである。書紀にある小市岡上陵は高取町車木にあり、同様に前に小古墳があり大田皇女の墓と云われている。このように書記の記録とも合致するが、小市岡と真弓岡では約14~5kmも離れており無理がある。書記

は天武天皇の命により舎人親王が編纂したが成立は720年と埋葬から53年しか経っていない。従って埋葬場所を間違えて記載したとは考えにくい。つまり新聞などを賑わした斉明陵とは考えられないのである。次に石舞台までバスで行き、蘇我稲目の墓ではないかと云われている都塚古墳に行った。南西の開口部より古墳内部が見え、立派な石室と石棺があり、いかにも最高権力者大臣稲目の墓にふさわしいと感じた。例会の最初に予定していた犬養万葉記念館が、休館で入れなかったのが残念であったので、万葉文化館前にある歌碑の前にて、全員で万葉歌を歌う。舎人娘の歌

大口の 真神の原に 降る雪は

いたくな降りそ 家もあらなくに

その後、藤原鎌足生誕の地、小原(大原とも)まで歩く。天武天皇と藤原夫人の万葉歌の歌碑の前にて全員で万葉歌を歌う。

わが里に 大雪降りり 大原の 古りにし里

に 降らまくは後 天武天皇巻2-103

わが岡の おかみにいひて 降らしめし 雪

のくだけし そこに散りけむ

藤原夫人巻2-104

天武が明日香の宮殿に大雪が降ったよと喜べば、夫人は私が土地神に言いつけて降らせたのよときりかえし、ユーモラスなかけあいの歌になっている。万葉歌を見ていつも感じるのは、古代人は天皇や貴族も、じつに素直にうれしいとか悲しいとかの感情を表現していることである。子供のように雪が降ったよ、うれしいなと天皇が喜び、小原に降るのはずっと後だろうよと歌い、夫人が何言っているのよと切り返す。ほのぼのとした夫婦の営みが伝わってくる。現代の私達も夫婦はもっと素直にお互いの気持ちを伝えるべきだなあと感じた。

バスで橿原神宮駅まで出て14:40駅にて解散した。万葉学者の故犬養孝先生は、「万葉集は歌うものです、目で読むものではありません」と言っている。人間の肉声で歌ってこそ、時空を超えて万葉人の思いが現代に蘇る。まさにその通りだと思う。特に人を恋する相聞歌は声に出さないと想いは伝わらない。皆様万葉歌は歌いましょう。